

3-計画の内容

事業③ 森に関わる多様な機会の創出

横浜の森を知って親しむことから、森づくり活動団体として森を育む活動を実践することまで、多様な森との関わり方ができるよう、森に関わるきっかけづくりの取組や森づくり活動を対象とした必要な支援の取組を進めます。

(1) 森づくりを担う人材の育成

● 森づくりを担う人材の育成

森づくりボランティアの登録者や森づくり活動に取り組む団体を対象に、基本的な知識と安全確保を学ぶための研修や、活動のスキルアップのための研修を開催します。

また、市民が森づくり活動に気軽に参加できる機会をつくるとともに、個人の森づくりボランティアと愛護会や森づくり活動団体との橋渡しの取組を進めます。

● 広報誌等での森づくり活動に関する情報発信

ニュースレターやウェブサイトを活用し、森づくりに関する情報発信を行います。



大学生を対象とした森づくり研修「横浜市の森づくり塾！」

(2) 森づくり活動団体への支援

市民の森や都市公園内のまとまった樹林で活動する団体を対象に、森づくりに必要な道具の貸出しを行います。また、活動に対する助成などの支援を行います。

また、維持管理作業の際に発生した間伐材などを樹林地内でチップ化したり、樹名板を作成するなどの活用を推進します。



チップ化作業支援

取組の目標

事業	取組	5か年の目標	備考
③	(1) 森づくりを担う 人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> ● 森づくりを担う人材の育成：50回 ● 広報誌等での森づくり活動に関する情報発信：20回 	
	(2) 森づくり 活動団体への 支援	<ul style="list-style-type: none"> ● 森づくり活動団体への支援：175団体 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 175団体の内訳： 市民の森、市有緑地などの樹林地で活動する150団体 都市公園内のまとまった樹林で活動する25団体

(3) 森に関わるきっかけづくり

● 多様な主体と連携した楽しみづくり

地域に根差した各区での取組や大学など多様な主体と連携したイベントや広報の取組を進めます。

また、森を活用した体験や学習ができる仕組みづくりなど、学校と連携した森を楽しむきっかけづくりに取り組めます。

● ウェルカムセンターの運営

ウェルカムセンターにおける展示解説や自然体験、環境学習の機会の提供等を、企業のCSR活動などと連携しながら実施し、基本的な森の楽しみ方から森の魅力まで、市民が森について理解を深めるための取組を推進します。

● 森に関する情報発信

市民の森・ふれあいの樹林のガイドマップを作成し、市民が気軽に森を訪れ、楽しむ環境づくりを推進します。



市内大学と連携したイベント「よこはま森の楽校」

(4) 森の多様な楽しみづくり

● 市民の森の開園

保全した森を、地域との連携や必要な整備等を行い「市民の森」として開園し、市民が自然に親しみ、憩える場として活用していきます。

● 地域における多様な森の利活用

森の機能を保ち、魅力を高めるため、樹林地周辺の施設や環境等の状況を踏まえた利活用計画の検討や地域における多様な森の利活用を進めます。



古橋市民の森(泉区)

取組の目標

事業	取組	5か年の目標	備考
③	(3) 森に関わる きっかけ づくり	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内大学や関係団体などとの連携や区主催による地域の森でのイベントの実施：180回 ● 学校と連携したきっかけづくり：推進 ● ウェルカムセンターでの森のマナーアップにつながるイベント等：50回 	<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント例： 森をつなぐウォーキング、森を活用した体験や学習など ・ ウェルカムセンター（全5館：自然観察センター、いはる里山交流センター、虹の家、四季の家、環境活動支援センター） ・ 新規に指定された市民の森等のガイドマップの作成・リニューアル
	(4) 森の多様な 楽しみづくり	<ul style="list-style-type: none"> ● 市民の森の開園：5か所 ● 地域における多様な森の利活用：推進 	

暮らしの身近にある横浜の森

横浜の森の多くは、薪や炭を得るために古くから人が手を入れることで人の営みに寄り添いながら豊かな動植物を育ててきました。生活様式の変化により森に手を入れる機会は減りましたが、現在も郊外のまとまった森や市街地の身近な森など、多くの森が残されています。いつも見る景色のどこかに森がありませんか。自宅や電車の窓から森がみえたり、通勤や買い物の途中で森を歩いてみたり、時間があれば、少し遠くの森でハイキングをしてみたりと、色々な場面で暮らしに潤いや安らぎをもたらしてくれ、楽しむことができるのが横浜の森です。

まずは身近な「森」に目を向けてみることで、今まで気付かなかった森のある暮らしの楽しみ方が見つかるかもしれません。このような身近に森がある暮らしを楽しむライフスタイルについて、発信していきます。

家の窓から	出かける途中で	森を歩いて
		
朝、目覚めると森から鳥のさえずりがきこえる	駅までの道、森の中から涼しい風がそよいでくる	今日のはのびり森の散歩 木漏れ日が暖かい

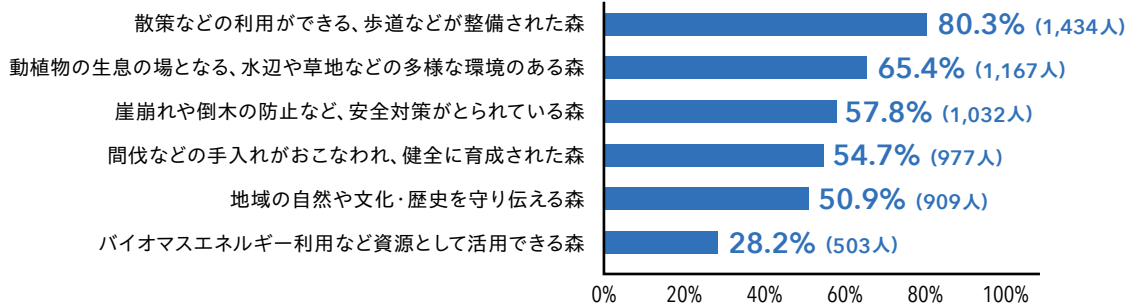
市民の森

1971(昭和46)年度からスタートした横浜市独自の制度で、緑を守り育てるとともに、土地所有者の方々のご協力により、市民の憩いの場として公開しています。2023(令和5)年4月1日現在、47か所(うち未開園4か所)指定しており、散策や生き物の観察、森づくり活動の場などとして、様々な目的で子どもからお年寄りまで幅広い世代に利用されています。

また、コロナ禍において生活に身近な緑が見直されたことから、これまで以上に多くの方が市民の森を訪れるようになっています。



市沢市民の森(旭区)



(2022(令和4)年実施「横浜の緑に関する市民意識調査」結果より)

n=1,785 複数回答可

「横浜にどのような森があったら良いと思いますか」という質問に対して、「散策などの利用ができる、歩道などが整備された森」が80.3%と、最も多い結果となりました。

ウェルカムセンター

市内5か所にあるウェルカムセンターでは森の生き物情報発信や自然体験行事、環境学習の機会の提供などを実施し、森に関わるきっかけづくりを行っています。

良好な森の育成

横浜の森は、多様な地形・地質、植生により構成され、人との関わり方も様々です。また、生物多様性の保全、レクリエーションの場、良好な景観形成など、様々な機能を有しています。

一方で、散策や動植物の保全、ふれあいといった利用ニーズに応えながら、自然災害などに対応することが求められており、市民の森や公園内のまとまった樹林地などにおいては、利用者や周辺の安全に配慮しながら良好な森づくりを進めています。

森の良好な管理を行う上で重要なのは、森ごとに異なる環境や機能、ニーズなどを把握し、目標とする将来像や管理方法を定め、関わる人の間で共有することです。

横浜市では、行政、市民で役割分担をしながら、森の維持管理の手法などを整理した技術指針である「横浜市森づくりガイドライン」や、森ごとに具体的な

管理計画を定めた「保全管理計画」に基づいた管理を行い、良好な森の育成を目指しています。

協働による森づくり

市民の森制度が始まって以降、横浜市では行政と市民との協働により森づくりを行ってきました。

市内の森では、愛護会や森づくり活動団体が活動しており、行政と役割を分担しながら良好な森の育成を行っています。大きな木の伐採などは行政が行い、希少な野草の保護といったきめ細やかな作業は愛護会などで行っていただいています。

また、森づくり活動に興味がある方を対象として個人で登録する「森づくりボランティア」の制度があり、登録すると市から森づくりに関する情報提供や研修などを受けることができます。

2018(平成30)年度には、森づくり活動の“はじめの一歩”として「森づくり体験会」の取組が始まりました。この取組は、実際に体験することで森づくりの楽しさや意義を知っていただくことに加え、森づくりボランティアと手入れを必要としている森、森づくりを行う団体との「橋渡し」としての役割も担っています。

また、2023年(令和5)年度には、森づくり活動団体と森づくりボランティアをつなげる新たな取組として、「よこはま森の助っターズ」を開始しました。



ウェルカムセンター内の様子



ウェルカムセンターイベント



協働による良好な管理



森づくり体験会

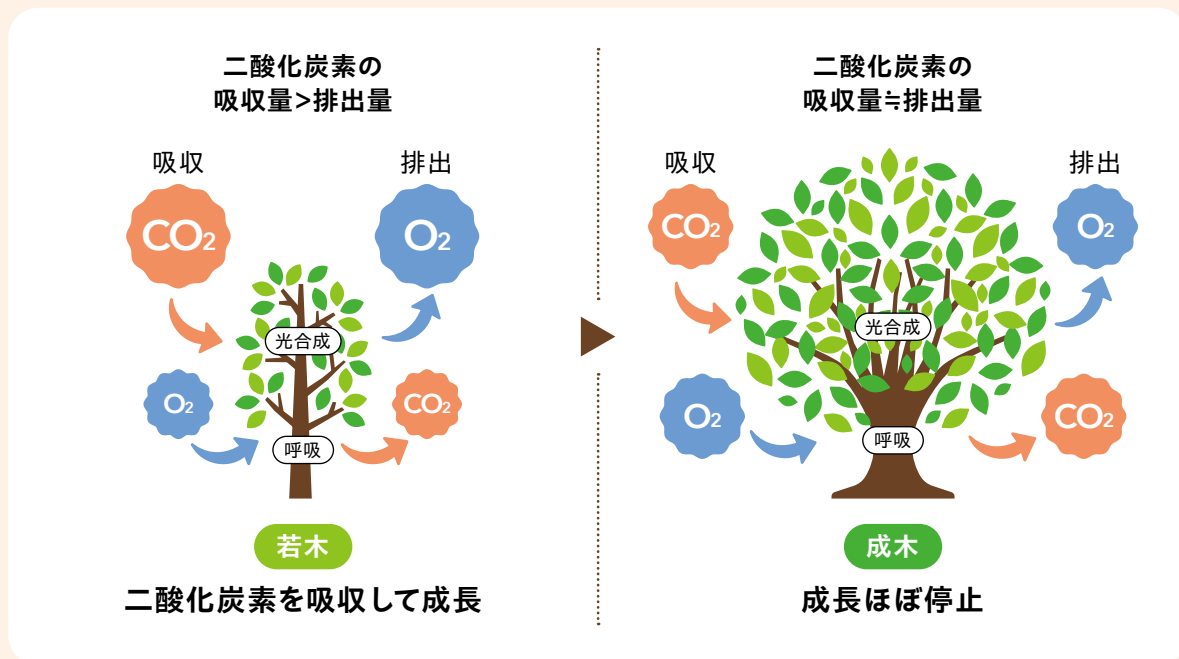


斜面の安全対策として萌芽更新を行った樹林地 上:作業前、下:作業後

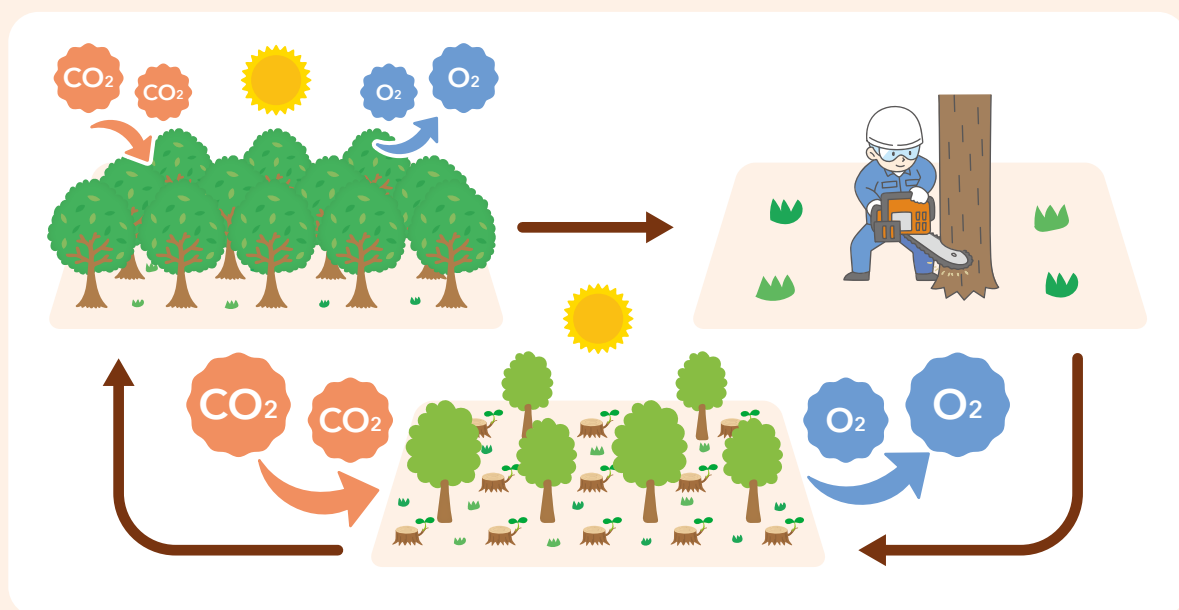
地球温暖化対策としての樹木の働き

● CO₂の吸収固定 <温室効果ガスの排出を削減する「緩和策」>

樹木は、大気中のCO₂を吸収し、光合成により体内に固定して成長します。一方で、呼吸によってCO₂も放出するため、その差分がCO₂吸収量となります。若い樹木は、CO₂吸収量が大きく、どんどん炭素を蓄えて大きくなりますが、ある程度成木になるとCO₂吸収量は低下し成長が緩やかになるため、樹齢に応じてCO₂吸収量は低下していきます。



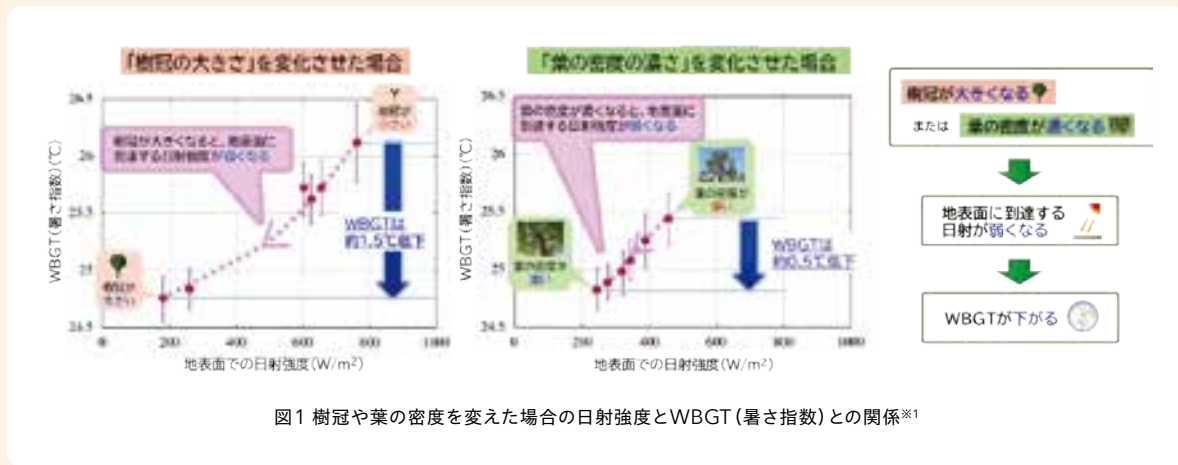
CO₂吸収量は、樹種によっても異なります。市内には、樹種や樹齢が様々な樹木から成る森が多く、一定範囲を一律に伐採し育成する林業主体の森とは異なりCO₂吸収量の正確な算定は難しいですが、良好な森づくりを進めるなかでは、森の若返りを図るため、年を経た樹木を所定の高さで伐採し、切り株からの萌芽を育てる「萌芽更新」を行うことで、再びCO₂吸収量を高めることにつながっています。



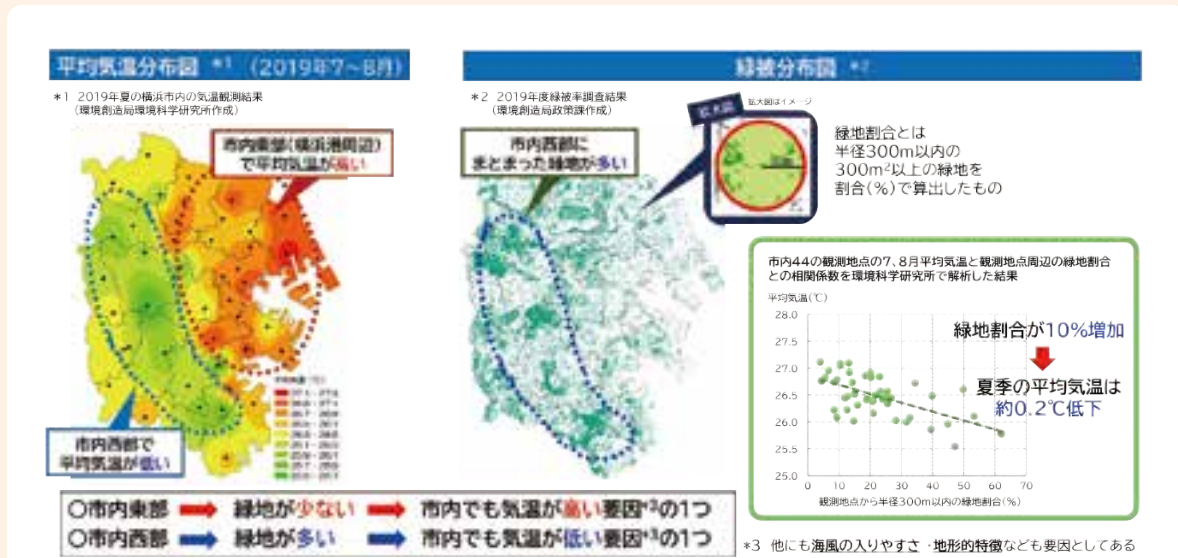
● 緑による暑熱緩和効果 <気候変動等により懸念される影響に備える「適応策」>

街路樹や公園の樹木には、まちなかでの暑さを和らげる効果があります。樹木には日射を遮り、地表面温度の上昇を抑えるほか、蒸散によって葉が熱くなりにくいという特徴があります。

このため、木陰で涼しさを感じることができます。木陰での涼しさに関する数値シミュレーションの結果^(※)から、樹木は葉の密度が濃くなる、または樹冠が大きくなるほど、木陰で人が感じる暑さ(WBGT(暑さ指数))を和らげる効果がより大きくなることを確認しています^(図1)。



また、まとまった緑地は日中の気温上昇を抑えるとともに、夜間は放射冷却により気温が下がることで冷気が形成され、ヒートアイランド現象を緩和する効果があります。環境科学研究所による解析では、観測地点の周辺の緑地割合が10%増加すると、その地点での夏季の平均気温は約0.2℃低下(面積に換算した場合、緑地が約10ha増加すると、夏季の平均気温は約0.6℃低下)する傾向にあることを確認しています^(図2)。横浜市内の西部にはまとまった緑地が多いため、他の地域よりも気温が下がる要因の1つとなっています。



※ 横浜における都市の熱環境の改善に向けた研究(環境創造局環境科学研究所と国立研究開発法人海洋研究開発機構との共同研究) 成果報告書 P. 27-43